

# 俊寬

一名  
鬼界島

世阿弥作

季は	地は	ワキ
雜	薩摩	赦免の使
		ツレ 丹波少将成経

ツレ  
平判官入道康頼

シテ  
俊寬僧都

「是は相国に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御祈りの為めに。非常の大赦行はるゝにより。國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の内。丹波の少将成経。平判官康頼二人赦免の御使をば。某承つて候ふ間。唯今鬼界が島へと急ぎ候。

成経康頼次第  
「神を硫黄が島なれば。くく。願ひも三つの山ならん。

サシ 「是は九州薩摩潟。鬼界が島の流人の内。

成経  
康頼  
「丹波の少将成経。  
平判官入道康頼。

二人 「二人が果にて候ふなり。われら都にありし時。熊野参詣三十三度の。歩みをなさんと立願せしに。其半にも数足らで。かゝる遠流の身となれば。所願も空しく早なりぬ。せめての事の余りにや。此島に三熊野を勧請申し。都よりの道中の。九十九処の王子まで。

下歌 「ことぐく順礼の。神路に幣を捧げつゝ。

上歌 「こゝとても。同じ宮居と三熊野の。く。浦の浜

木綿ひとへなる。麻衣のしをるゝを。只其まゝの白衣にて。真砂を取りて散米に。白木綿花の御祓して。神に歩みを運ぶなり。く。

シテ一聲 「後の世を。待たで鬼界が島守と。

地 「なる身の果の闇きより。

シテ 「闇き道にぞ入りにける。

サシ 「玉兎昼眠る雲母の地。金鶏夜宿す不萌の枝。寒蟬枯木を抱きて。鳴き尽して頭をめぐらさず。俊寛

が身の上に知られて候。

康頼詞

「あれなるは俊寛にてわたり候ふか。是までは何の為めの御出でにて候ふぞ。

シテ詞

「早くも御覧じとがめたり。道迎の其為めに。酒を持ちて参りて候。

康頼 「そもそも一酒とは竹葉の。此島にあるべきかと立ち寄

り見れば。や。是は水なり。

シテ「是は仰せにて候へども。それ酒と申す事は。もと

是れ薬の水なれば。れい酒にてなど無かるべき。

康頼成経  
「げにく是は理なり。頃は長月。

シテ「時は重陽。

康頼成経  
「所は山路。

シテ「谷水の。

三人「彭祖が七百歳を経しも。心を汲み得し深谷の水。

地  
「飲むからに。げにも薬と菊水の。く。心の底も白衣の。ぬれてほす。山路の菊の露のまに。我も千年をふる心地する。配所はさてもいつまでぞ。

春すぎ夏たけて又。秋暮れ冬の来るをも。草木の色ぞ知らするや。あら恋しの昔や。思ひでは何につけても。あはれ都にありし時は。法勝寺法成寺。たゞ喜見城の春の花。今はいつしか引きかへて。五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃。の

む酒は谷水の。流るゝも又涙川。水上は我なる物を。物思ふ時しもは。今こそ限なりけれ。

ワキ一声  
「早船の。心にかなふ追風にて。舟子やいとゞ勇むらん。

詞  
「いかに此島に流され人の御座候ふか。都より赦免状を持ちて参りて候。急いで御拝見候へ。

シテ詞  
「あら有難や候。やがて康頼御覧候へ。

康頼  
「何々中宮御産の御祈りの為に。非常の大赦行はるゝ

により。国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の  
流人の内。丹波の少将成経。平判官入道康頼二人  
赦免ある所なり。

シテ  
「何とて俊寛をば読み落し給ふぞ。

康頼  
「御名はあらばこそ。赦免状の面を御覧候へ。

シテ  
「さては筆者のあやまりか。

ワキ  
「いや某都にて承り候ふも。康頼成経二人は御供申せ。俊寛一人をば此島に残し申せとの御事にて候。

シテ

「こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ配所。非常も同じ大赦なるに。一人誓ひの網に漏れて。沈み果てなん事は如何に。

クドキ  
「此ほどは三人一処に有りつるだに。さも恐ろしく冷ましき。荒磯島にたゞ一人。離れて海士の捨草の。波の藻屑のよるべもなくて。あられん物か浅ましや。歎くにかひも渚の千鳥。泣くばかりなる有様かな。

クセ

「時を感じては。花も涙をそゝぎ。別れを恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼ある所にて。今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと。此あはれなどか知らざらん。天地を動かし。鬼神も感をなすなるも。人のあはれなる物を。此島の鳥獸も。鳴くは我を弔ふやらん。

シテ

「せめて思ひの余りにや。

地

「さきに読みたる巻物を。又引き開き同じあとを。  
繰り返しく。見れどもくたゞ。成経康頼と。  
書きたる其名ばかりなり。もしも礼紙にやあるら  
んと。巻きかへして見れども。僧都とも俊寛とも。  
書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば。  
さめよくと現無き。俊寛が有様を。見ることあ  
はれなりけれ。

ワキ 「時刻うつりて叶ふまじ。成経康頼二人はゝや。御

船に召され候へとよ。

成経康頼

「かくてあるべき事ならねば。よその歎きをふりす  
てゝ。二人は船に乗らんとす。

シテ

「僧都も船に乘らんとて。康頼の袂にとりつけば。

ワキ

「僧都は船に叶ふまじと。さも荒けなく言ひければ。

シテ

「うたてやな公の私といふ事のあれば。せめては向  
ひの地までなりとも。情に乗せて給び給へ。

ワキ

「情も知らぬ舟子ども。櫓櫂をふりあげ打たんと

す。

シテ 「さすが命の悲しさに。又立ち帰り出船の。

詞 「纜に取りつき引きとむる。

ワキ 「舟人もづな押し切つて。船を深みに押し出だす。

シテ 「せん方波にゆられながら。たゞ手を合はせて船よなふ。

ワキ 「船よといへど乗せざれば。

シテ 「力及ばず俊寛は。

地 「もとの渚にひれふして。松浦佐用姫も。我身には  
よも増さじと。声も惜しまず泣き居たり。

三人「痛はしの御事や。我等都に上りなば。よきやうに  
申し直しつゝ。やがて帰洛はあるべし。御心づよ  
く待ち給へ。

シテ 「帰洛を待てよとの。呼ばゝる声も幽なる。頼みを  
松陰に。音を泣きさして聞きるたり。

三人「聞くやいかにと夕波の。皆声々に俊寛を。

シテ 「申し直さば程もなく。

三人 「必ず帰洛あるべしや。

シテ 「これは誠か。

三人 「なかくに。

シテ 「頼むぞよ頼もしくて。

地 「待てよく」といふ声も姿も。次第に遠ざかる沖つ  
波の。幽なる声絶えて。船影も人影も。消えて  
見えずなりにけり。あと消えて見えずなりにけり。